



日本プライマリ・ケア連合学会
中国ブロック支部



発行人:中国ブロック支部長 松下明
(岡山家庭医療センター 奈義ファミリークリニック)

【学術大会参加レポート】

今年度から中国ブロックでは各県の医療系学生の学術大会参加への補助を行うこととなりました。参加者のレポート続編を共有させていただきます。(文責 岡山家庭医療センター 松下明)

【山口大学医学部医学科 6年 林田佳奈】

今回参加させていただいた理由をいくつかあげさせていただきたいと思います。地域医療や町医者としての役割、自分自身がどのようなことを行っていく、どのような医師になりたいかのビジョンの明確化と目標設定、さらに他県で行われていることを知ることでの視野の拡大、山口において足りないこと、この先必要となることを考えるために参加させていただきました。いくつか拝見させていただきましたが、その中でも特に興味深く新しい発見と感動を覚えたものを一つ上げさせていただこうと思います。「トランスジェンダーのヘルスケア：プライマリケアで実践を考える」です。これまで、当事者の話を聞くことは多々ありましたが、それに対するケアを行っている医師のお話を聞くことは初めてだったので大変勉強になりました。差別をしないようにしようと言うことは簡単です。しかし、実際の医療現場では環境は全く整っていません。医療現場で医師たちがどのような対応を彼ら彼女らにしているか、トランスジェンダーであることで現場にどのような問題が生じているのか、そして、そこに対するケアが日本全体でどれくらいの施設で行われ、何人の医師がいるのかということを知ることができました。実際、山口県ではまだそこに対する医療が整っていません。これから展望として、その点にも焦点をあてながら、自身が医療を学んでいくことで、行き場をなくし、疾患で悩んでいる患者さんの受け皿になれるのではないかと考えました。トランスジェンダーの方々は、これくらいなら我慢しよう、行くのはやめよう、行きたくないと考え、その結果、救急搬送される例が少なくないようです。そのような方たちが、気兼ねなくシスジェンダーの方々と同じように医療を受けることができる地域に、医師になろうと思えました。今回参加でき、本当に良かったと思います。

【岡山大学医学部医学科 5年 金子怜奈】

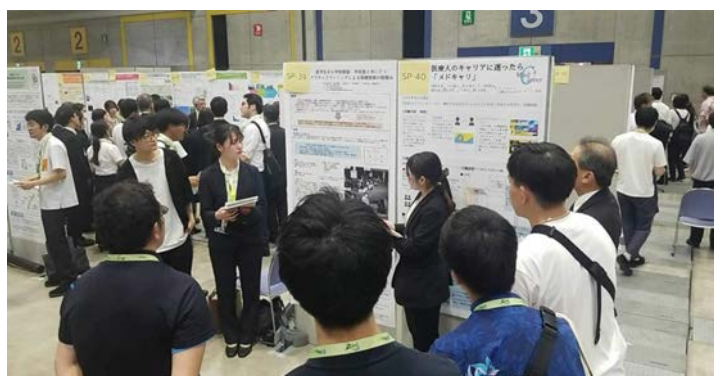
2024年6月7日～6月9日に開催された第15回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会において、2日間の参加を通して経験したこと、そこから得た学びについて報告する。

1つ目は、他大学の学生との交流である。ポスター発表や口演の学生セッションでは、低学年や同学年でも研究、活動に取り組んでいる人が多くいることを知り、刺激を受けた。また、ポスター発表の経験を通して、学会は我々の活動を共有し意見交換を行い、また他の活動を知り今後の向上に繋げる場として最適であり、重要だと感じた。

2つ目は、ボランティアやブースへの参加である。医療とアートでボランティアとして参加したり、ヨガやマトリョミン、鍼技術の体験ブースへの参加を通して、プライマリ・ケアが医療職のみならず、様々な職種や地域全体でつくるものであることを肌で感じた。

3つ目は、様々なキャリアをもつ先生方との交流である。私は複数分野に興味があり将来の専門分野が絞れていなかったが、キャリアチェンジした先生方からお話を伺う中で、専門分野は必ずしも1つである必要はなく、やりたい事をやって違えば変えられるし、それができる環境はあるということを知れたことは今後キャリアを考える上で大変勉強になった。

今回の学会参加を通して、将来は専門性と総合性を持った広い視野で患者に寄り添える医師になり、地域住民の健康増進に貢献したいと考えた。



【プライマリケア学会 中国ブロック地方会 生涯学習講座の報告】

- ・日時:令和6年4月21日(日) 9:00~12:00
- ・会場:岡山大学病院 総合診療棟 西5階 カンファレンス室
- 1) 講演「在宅緩和ケアの理解を深める」

講師: 田上恵太 先生(悠翔会くらしケアクリニック練馬/東北大学大学院医学系研究科 緩和医療学分野)

- 2) シンポジウム「自宅?病院?多職種で紡ぐ、在宅緩和のACP」

座長 佐藤医院 佐藤涼介

演者:

医師 光田栄子(かとう内科並木通り診療所)

薬剤師 国富達也(マスカット薬局奈義店)

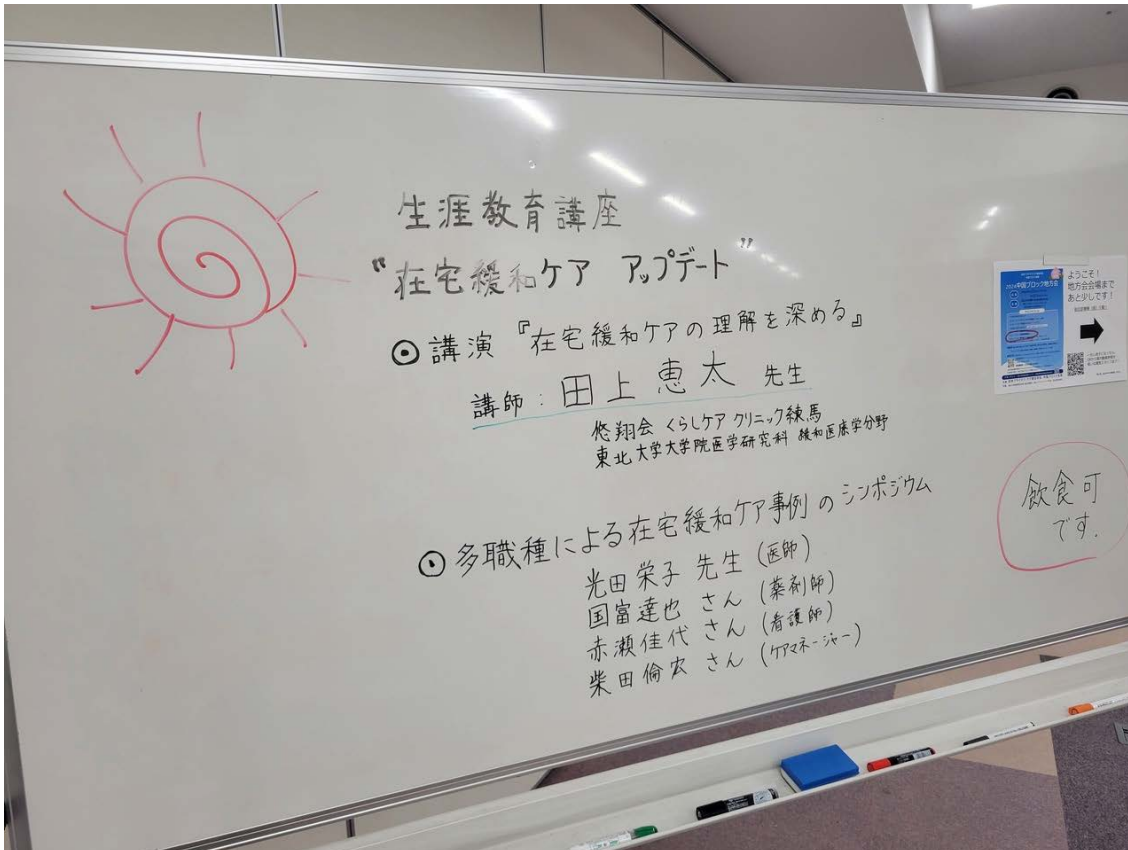
看護師 赤瀬佳代(訪問看護ステーション晴)

ケアマネージャー 柴田倫宏(株式会社メゾネット・株式会社メゾネットホールディングス)

第一部の講演では、緩和医療の若手のホープである田上先生にプライマリケア×緩和医療構想を皮切りに、終末期の輸液の是非や予後予測、ステロイドの使い時、そして終末期の身の置き所のなさへの対処方法など、在宅緩和で役立つたくさんのTipsを教えてくださいました。

第二部では在宅に関わる多職種によるシンポジウムを開催した。シンポジストが在宅緩和の ACP について、それぞれの立場で個々に考えていること、他職種に伝えたいことを「青年の主張」と題して話していき、会場も巻き込みながら在宅緩和にまつわるエピソードを議論していきました。多くの参加者が現地参加してくれ、会場からも多くの質問や感想が寄せられ、盛り上がった議論となりました。事後アンケートでも、「ACP に関して家庭医としてどう振る舞うかが明確になりました」「緩和ケアにおける他職種連携の本音を聞くことができてよかったです」などポジティブな意見が多く寄せられました。

私個人としても、明日から使える知識を講演で学び、シンポジウムでは在宅を共に支えるチームメンバーの心意気を直に感じることで、学び深い経験となり、それを会場にいるプライマリケアに関わる参加者と共有できたことは、非常に嬉しい時間でした。(文責 光田栄子)









【m-HANDS 2024 第1-2回の報告】

中国ブロックでの指導医養成の報告

出雲家庭医療学センター大曲診療所 藤原和成

岡山家庭医療センター奈義ファミリークリニック 松下明

【m-HANDS-FDF】

(modified - Home and Away Nine DayS - Faculty Development Fellowship)

9年の間継続してきた中国ブロックの指導医養成コースです。10年目となる今年度はオンライン開催に加え一部オンサイトを導入します。8月から3月まで、月に1回全8回のコースとして実施しています。

今年度も、JPCA-MLなどで募集して中国地方の指導医4名が参加中です。チームを作って様々な課題に取り組んでもらっています。

以下に第1回に参加してくれた指導医からの報告の一部を掲載します。

2025年度も引き続き開催を予定しています、ご興味のある方はぜひご連絡下さい。

〈目的〉

中国ブロックの指導医の養成とプログラム運営の質向上を通して、プライマリ・ケアの普及と発展をめざす

〈対象〉

- ・中国ブロックに所属しており、家庭医療後期研修を修了した医師
- ・中国ブロックの家庭医療後期研修に関わる指導医

〈アウトカム〉

Core Competence : Adult Educator (成人学習支援者)

学習者と向き合い、その学びに気を配り、学びの場をサポートできる

教育者の役割と限界を知り、学習者と協同的に学び、生涯学習者を育てる姿勢で関わる
学習者の学びを促進するための理論と技術を適切に用いることができる 参加者と講師による学習共同体の形成を勧め、ブロック内の指導医ネットワークを作る
机上のプログラム作成だけでなく、各現場での仕組みづくりや教育チーム形成ができる
総合診療の魅力やプログラムの魅力を効果的に伝えられる発信力や求心力を発揮できる
ツールの活用や工夫などで独創的で質の高い遠隔教育ができる

第1回 オンライン開催 2024年8月17日

【フィードバック】

まずフィードバックについて講師の木村先生より事前課題内容の復習を頂いた。次いで、実際に受けた印象的なフィードバックについて参加者4名が各自発表をした。木村先生を中心に振り返りを行い、なぜそれが印象的であったのか、そこから何が学び取れるかを明確にした。新鮮な視点からの指摘を受け、よりよいフィードバックのために必要な要素について考えを深めた。その後、これまで有用とされてきたフィードバック方法の注意点、理想的な手法について講義があった。フィードバック前に学習者と指導者の関係性を確立すること、状況に応じてペンドルトンモデルとR2C2モデルを使い分ける方法はすぐにでも取り入れたいと感じた。(池田晃太郎)

【ファシリテーション】

事前にファシリテーションに関する4つのステップ(共有・発散・収束・決定)と4つのスキル(場のデザイン・対人関係スキル・構造化・合意形成)についてのレクチャー動画が提示されていた。

当日はそのおさらいが講師からなされ、チームでファシリテーターを交代しながらの模擬ディスカッション(患者からの贈り物を受け取る際の基準策定)をおこなった。

第3ステップにあたる「収束」のファシリテーションが難しく、特にオンラインでは情報共有と整理に用いる媒体に工夫が必要であることを感じた。

今後もファシリテーションの機会は大いにあり、主題や参加者の背景が変わっても対応できるよう活かしていきたい。(戸川 雄)

【チームビルディング】

まず、チームビルディングに関連する用語や、チームビルディングの構成要素やデザイン、心理的安全性についてのレクチャーを受けた。次に、「月での遭難 in 2025」というコンセンサスゲームを行った。「自分の意見を伝える」「相手の意見を受け入れる」ことに重点を置き、全員が納得できる結論に至ることを目的とされていたが、大きな方針が最初から「助けが来るまで身を守る」ことで全員一致していたこと、参加者4人とも月に関する知識が乏しかったことから、臆することなく各自の意見を伝え、受け入れることができていたと思う。ゲームを通じて、自分がチーム内でできそうな関わり方について考えることができたので、これからの活動にも活かしていきたい。(山本優里)

【青年の主張】

効果的なプレゼンテーションの方法を学習することを目的としたセッションでした。「医学や仕事以外」の内容について聞き手に何らかの具体的な行動を引き起こすことを目的としたプレゼンテーションを3分で行うという課題に対して参加者が各々準備したプレゼンを行いました。プレゼン後の振り返りでは、良かった点やより良くするためのポイントについてのフィードバックがあり、効果的なプレゼンテーションを行うための方法について具体的に学ぶことができました。何より他のプレゼンターの発表を聞くことで刺激を受け、より良いプレゼンテーションをしていきたいと思うことができたことが収穫です。(谷口尚平)

第2回 米子オンサイト開催 2024年9月21日(土)～22日(日)

【ビデオレビュー】

2名のフェローが実際に指導を行う様子をビデオ撮影し、5分程度に編集したものを順番に供覧した。まずは当事者のフェロー本人が省察を行い、参加者からのコメントを受けディスカッションを行った。1本目のビデオは積極性のみられない専攻医に対し専門医試験に向けた準備を促す内容であった。SL理論を用いて学習者の段階に応じたサポート方法を選択する重要性を学んだ。2本目は日々の症例振り返りの中で訪問診療先の患者に対し胃瘻増設が必要であるかを議論する内容であった。目的を決めてから議論を始めることの重要性、目線の使い方・席の配置にも留意すべきであるという視点に大いに学びがあった。(池田晃太郎)

【効果的な学習】

教育における効果とは、学習転移つまり学んだことが現場で実践され成果につながることである。それぞれの参加者が自らが過去に行った教育について、Kirkpatrickの4段階(特にResultsとBehavior)に沿った目標を考えるワークを行った。教育の目標について考える時は学習者の行動の変化(Behavior)に注目しがちであったが、患者や地域にどのような効果をもたらすのか(Results)という目標まで視野を広げることができた。(谷口尚平)

【リーダーシップ】

事前に各フェローが想像するリーダーシップをイラストとして描き、当日供覧した。多種多様なメンバーを受け入れ、全体の調和をとる鍋料理や、指揮者などのイメージ画像が提示された。その後、各自がこれまで関わったチームを例として、その中で発揮できたリーダーシップを探るディスカッションをおこなった。マネージメントとの差異を意識しながら後天的に獲得し、部下の発達段階や環境に応じたリーダーシップの型を使い分けられるようにしたいと感じた。(戸川雄)

【青年の主張R】

第1回に引き続き、「限られた時間で伝えたいメッセージを伝え、聞き手に何らかの具体的な行動を引き起こすこと」を目的にプレゼンテーションを行った。時間が非常に短いからこそ、よりいっそう伝えたいメッセージを洗練する必要がある、伝える情報を取捨選択することが重要だと学んだ。それぞれ工夫を凝らしていたが、ディスカッションの中でオンラインと対面の違いという観点からもっとブラッシュアップできる点が出てきて、プレゼンテーションの奥深さ、面白さを感じた。今後の診療や教育活動においても、何を伝えるか、どう伝えたら相手の具体的な行動を引き起こせるかをしっかりと考えていきたい。(山本優里)

【カリキュラム開発】

実際のカリキュラム開発に向け、各フェローが個々でワークを行った。個々のテーマ設定に対し、適宜m-HANDSスタッフのサポートを得て疑問を解消しつつ進めた。まず指導者目線および学習者目線のニーズを明確にし、一般目標、個別目標の順に整理した。その後に先に評価方法を考えた後に、具体的な方略を考えた。実際にカリキュラムを開発する際に、まず考える手順を学べたことに大きな学びがあった。記述していく中で自身が整理できていない点が浮き彫りになりカリキュラム開発の難しさを実感する一方で、具体的なアドバイスをもらいながら進めることができたため自身の関わる教育内容を改善していくことができる手応えを感じた。(池田晃太郎)



第3回は10月19日（土）、オンライン開催を予定しています